

ナンバー23

2007(平成19)年10月2日鑑賞<試写会・梅田ブルク7>

★★★★



監督=ジョエル・シューマッカー/脚本=ファーンリー・フィリップス/出演=ジム・キャリー/ヴァージニア・マドセン/ローガン・ラーマン/ダニー・ヒューストン/ローナ・ミトラ/リン・コリンズ(角川映画配給/2007年アメリカ映画/99分)

……この映画には「23エニグマ」や「イルミナティ3部作」など、日本人にはサッパリわからない欧米文化の深層に巣くう不気味な「怪物」がテンコ盛りだが、要は23という数字にまつわるゴロあわせ集……？ いや、決してそんなつまらない映画ではない！ 後半からラストにかけて加速されるミステリー性と面白さは抜群で、きっとあなたはそれに圧倒されるはず……。もっとも、「ナンバー23」の謎にはそれ以上深入りしない方が、あなたのため……？

単なる数字のゴロあわせ……？ それとも……？

この映画のタイトルは、原題が『The Number 23』なら、邦題も『ナンバー23』と全く同じ。これは、中国や韓国で上映されてもきっと同じはず。なぜなら、この映画はまさに数字の23に焦点をあてた映画、もっと正確に言えば、23という数字に取りつかれて人生を狂わせてしまった人物たちを描いた映画だから……。

しかし、この映画をその本質に迫って正確に理解するのはきわめて難しい。プレスシートをみても、「23エニグマ」というコーナーでは、ウィリアム・S・バロウズによる23という数字の不吉な啓示(の一部)が解説されていると書かれているが、そりゃ一体ナニ……？ また、バンギ・アブドゥル(戦略意味論)の「最後の封印『23』が今、解き放たれる」というコラム(?)では、「その『怪物』とは、ユダヤ秘教伝統カバラ、錬金術などルネサンスに花開いた秘教思想、テンプル騎士団、フリーメイソンなどヨーロッパと新大陸を席卷した秘密結社のネットワーク、そして19世紀末から今日に至るまで通奏低音として振動し続けているテクノロジーと霊性のエロティッ

クな交歓、それら『見えざる西欧』の地下水脈の総体である」などと、日本人の私たちにちょっとやそっとでは理解できない解説がテンコ盛り……。

これらを読み、またスクリーン上で展開されるナンバー23に取りつかれた何人かの不幸な人物たちの姿をみていると、それが単なる数字のゴロあわせではないことは明白。するとナンバー23とは……？ それをつきつめて考えはじめるとヤバイ。なぜなら、その時点ですでにあなたも、ナンバー23に取りつかれた不幸な人間になりつつあるのだから……？

デビュー作とは思えない脚本のすばらしさ

邦画もハリウッド映画も、最近は原作を基にした映画が多いが、やはり映画の魅力は映画用に練られたオリジナル脚本にもとづくユニーク性にある。しかして、この映画の脚本を書いたイギリス出身のファーナーリー・フィリップスは、本作がデビュー作とのこと。映画の後半明らかにされる驚愕の事実をしっかりとイメージしたうえで、ファーナーリー・フィリップスが参考にした重要な文献が『ダ・ヴィンチ・コード』（06年）のベースになった「陰謀文学の傑作」と称されるロバート・アントン・ウィルソンの『イルミナティ3部作』とのこと。つまりファーナーリー・フィリップスは、『イルミナティ3部作』から23という数字のもつ神秘性を物語の重要な鍵として取り入れたわけだ。

私が最近新聞記事を読んですぐに購入した本が齊藤守彦の『日本映画、崩壊—邦画バブルはこうして終わる』（2007年・ダイヤモンド社）。これはそのタイトルどおり、あらゆる視点から邦画の崩壊を論じたものだが、私の分析では魅力的なオリジナル脚本が少なくなったことが、邦画崩壊の1つの大きな原因。そんな視点でみれば、ファーナーリー・フィリップスが書いたこの映画の脚本はまさに絶品！

2月3日が誕生日の人は、是非……

ラテン語のアルファベットは23文字で構成されているとか、あの事件は23日に発生したという話はそれなりにわかるが、タイタニック号が沈没した1912年4月15日を「 $1 + 9 + 1 + 2 + 4 + 1 + 5 = 23$ 」としたり、ノベル・フェイト古書店の所在地59番地を「 $5 + 9 + 9 = 23$ 」とするのはいかにも数字的こじつけ。だってそれなら、ヒットラーが自殺したのは1945年4月すなわち「 $1 + 9 + 4 + 5 + 4 = 23$ 」として、

日を計算に入れないのはなぜ……？

映画前半はそんな数字のゴロあわせを次々と登場させながら、主人公ウォルター（ジム・キャリー）とその妻アガサ（ヴァージニア・マドセン）そして一人息子ロビン（ローガン・ラーマン）がみせる現在の幸せなストーリーと、アガサがウォルターの誕生日にノベル・フェイト古書店で購入しプレゼントした『ナンバー23』という本の主人公フィンガリングの、自叙伝ともいべき殺人ミステリーの物語が並行して展開されていく。

ところで、ウォルターの誕生日はいつ……？ それは2月3日、すなわち月と日を並べると23の日。そんな日に『ナンバー23』という本をプレゼントされたことによって、以降ミステリアスな物語が展開していくことに……。2月3日が誕生日の人は、是非この映画を……。

ミステリアスなフィンガリングの物語の一端は……？

『ナンバー23』という本が最初に読者に伝えるメッセージは、「この小説に登場するものはすべて想像上の人物であり、万が一、その生死に関わらず実在の人物によく似た者を見つけた場合、そこから先は読まないでください……。」という、何とも思わせぶりなもの。この本は、第1章から第22章までで構成されているのだが、脚本を書いたファーナーリー・フィリップスと『オペラ座の怪人』（04年）を監督したジョエル・シューマッカー監督は、最初からその全貌を見せず、少しずつ小出しに……？

第1章はフィンガリングの少年時代が語られていたが、その生いたちは実はウォルターにそっくり……。もっとも、第2章以下では、ウォルターは動物管理局に勤めているのに対し、フィンガリングは刑事だから、ウォルターとフィンガリングは全く異なる人生……？

フィンガリングが刑事として挑んでいる仕事は、自殺願望のブロンド女（リン・コリンズ）の説得だったらしい。そのブロンド女は日付に時間、車のナンバー、本のページ、エレベーターの階数等、身の回りのものすべてに「23」が潜んでいるという妄想にかられ、今や首吊り自殺寸前までの錯乱状態になっていたわけだ。いったんはフィンガリングの説得が成功したかに見えたが、さてそのブロンド女は……？

大きな問題は、これを契機としてその妄想がブロンド女からフィンガリングに移ったこと。したがって、第2章以降はフィンガリングが語るナンバー23のミステリーが

満載……？

■次第にウォルターも……？

本を読む時、その本の中に没頭してしまうのは基本的にいいことだし、そうできるのはその本がそれだけ魅力的だということだ。ウォルターにとって、フィンガリングが語る『ナンバー23』の第2章以下はそうだったよう。しかし、第2章、第3章、第4章とウォルターが読み進むにつれ、23という数字がもつ妄想は、次第にウォルターの頭の中いっぱい広がっていったから、さあ大変……。

すなわち、ウォルターもフィンガリングと同じように、23という数字に取りつかれ、時々変なことを口走るようになったから、妻アガサの心配も日増しに強まっていくことに。おまけに息子のロビンまで、時々数字のゴロ合わせに協力的……？ 映画の中盤、スクリーン上にはそこらあたりのストーリーがいろいろと複雑に展開されていくのでご注目。

第3章

ヒネリの効いた設定・ラストが新鮮！



© MMVI NEW LINE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

そんな中、今や23という数字にのめり込んでしまったウォルターはどこから、どんなヒントを見つけ出すのだろうか……？ そしてまた、ウォルターが突き止めていくある男とは……？

別に俳優の出演料をケチったわけではないだろうが、この映画はなぜか1人2役、1人3役とされている。そしてそれが、一層この映画のミステリー性を増幅させる役割を果た

している。「スパロウには地獄が待っている、きっと……」という呪いの言葉を吐いた後、自らの首をかき切る老人の正体は……？ また、妻の友人として登場するアイザック（ダニー・ヒューストン）の正体は……？ これらの謎が謎を呼び、だんだんワケがわからなくなっていくこと必至……？

謎解きのキーとなるのは、墓地

映画の冒頭、動物管理局に勤めるウォルターが、街をうろつく野良犬を捕獲するシーンが登場する。その日は彼の誕生日であり、妻アガサと夕食の約束がある日だったから、ウォルターは手っとり早く仕事を処理し終わらせたかったのだが、あいにく時刻は夕方5時を過ぎてしまうことに……。しかもあと一歩というところで野良犬に腕をかまれたうえ、逃げられてしまうことになったのはウォルターの大失敗。

そんなウォルターが、やっとその野良犬を追い詰めたのは墓地の中のある1つの墓石の前。ウォルターの捕獲の手を逃れて逃走してしまった「NED」という名前が刻まれていた野良犬がお気に入りの場所がここだった、というから少し薄気味が悪い。そしてこの墓地のこの墓石こそ、この映画の謎を解くキーとなる場所。さて、そこにはあるいはその地中には一体ナニが……？

ラストに向けてグイグイと……

この映画の脚本がすばらしいのは、スポーツタイプの高級車と同じように、後半からラストに向けてミステリアス性がグイグイと加速すること。ウォルターが23という数字に悩み抜き、やっとある男を突き止めたにもかかわらず、前述のようにその男は「スパロウには地獄が待っている、きっと……」と言い残し、自らの首を切って命を絶ってしまった。これによって、ヒントが消滅してしまったかに見えたが、面白さはそこからラストに向けてさらに加速していくことに。

『ナンバー23』の著者フィンガリングとは一体ダレ……？ そして、あのお墓の中に埋められている人物は一体ダレ……？ そんな風に疑問をもつあなたの視点は正しいのだが、正解は映画を観なければ絶対にわからないはず。そして、そんなミステリー色いっぱい映画にはこれ以上詳しい評論は無用。後は、あなた自身の目でしっかりと……。

2007(平成19)年10月6日記